を伺ったところ、今は地下足袋の100パーセントが海外生産だと聞かされました。じゃあこの筋はないなと思ったんですが、その後、お隣の羽生市の藍染会社の社長さんから、取引先に足袋屋さんがあることを教えていただき、そこではじめて行田市が足袋の産地だということを知ったんです。それで「じゃあ、足袋屋さんの話にしよう」と。

市長　行田市は、昭和初期には全国シェアの約8割、およそ8千万足の足袋を生産していました。当時は街中からミシンを踏む音が響いていたそうです。取材にも来ていただいたんですね。

池井戸　二度ほど伺いました。小説でいちばん大事なのは、雰囲気が出ているかどうかなんですが、足を運ぶとその土地の空気感がつかめるんです。そして、工場で足袋の作り方を教えていただきつつも、実は働いている女性たちの元気のよさを感じるほうが大事だったりする（笑）。明るくて気が強く、ノロノロしていると社長でも叱る、そういう女性たちの姿は、作中にも書かせていただきました。

市長　「かかあ天下と空っ風」は上州名物として有名ですが、行田市にも、そういう元気な女性がたくさんいますね。

池井戸　すごく立派な前方後円墳があったり、きれいな用水が流れていたりしていたのも、印象に残っています。

温故知新で伝統を守る

市長　『陸王』には、伝統的な産業である足袋作りを続ける苦労も描かれています。市内でも、現在は足袋屋さんの数がずいぶん少なくなりました。

池井戸　服飾文化の変化に伴っての、時代の流れでしょうね。

市長　しかし昨年は、行田市郷土博物館が所蔵する『行田の足袋製造用具及び製品』が国の登録有形民俗文化財に登録されるという明るいニュースもありました。

池井戸　私も取材で博物館に行きましたが、大勢の縫い子さんたちが体育館のような空間で一斉に足袋を縫っている写真などは、壮観でしたね。

市長　ええ、作品の中で描かれたように、後継者難は現実問題だと思いますが、若い女性職人が埼玉県の伝統工芸士に認定されたり、やはり若い市内の経営者が、ファッションという観点で捉え直した新しい足袋をヨーロッパでPRしたりと、新しい取り組みも行われています。

池井戸　面白いですね。ただこの先、業界単独の努力だけでは、製造数を増やすことはなかなか難しいでしょう。伝統的には、お茶、踊り、祭りの場面で足袋が必要とされていて、そういうことへの関心が薄れると、どうしても足袋を買わなくなる。足袋は、足袋だけで存在しているのではなくて、何かと結びつく道具だと思うんです。

市長　確かに、その通りです。

池井戸　たとえば、私はお茶をやっていたので外履き用の足袋と白足袋を持っていましたが、そうした機会があるだけでも、2足の足袋が必要になる。そんなふうに、本来の足袋の使用機会を増やす取り組みができるとよいのかもしれません。

市長　市では、寺子屋事業といって、子どもたちに昔の遊びや伝統文化を勉強してもらっているのですが、私は、学校の中でもっと足袋を履いてもらいたいと思っているんです。行田市の伝統的な産業である足袋作りは、絶対に絶やすことはできない。ですから、職人技を発揮して、小が大をしのぐこはぜ屋の奮闘には、とても勇気をもらいました。古いものを大切にしながら新しいものを作っていく、その温故知新の感覚を、常に持っていたいと思っています。

Profile　プロフィール

池井戸 潤（いけいど じゅん）

1963年岐阜県生まれ。慶應義塾大学卒。『果つる底なき』で江戸川乱歩賞、『鉄の骨』で吉川英治文学新人賞、『下町ロケット』で直木賞を受賞。

主な作品に、半沢直樹シリーズ『オレたちバブル入行組』『オレたち花のバブル組』『ロスジェネの逆襲』『銀翼のイカロス』、花咲舞シリーズ『不祥事』、『空飛ぶタイヤ』、『ルーズヴェルト・ゲーム』、『七つの会議』、『民王』、『下町ロケット2 ガウディ計画』などがある。最新刊は『陸王』。

知られざる強みを知ろう

池井戸　小説には、ある程度のリアリティーが必要です。たとえば、苦労している中小、零細企業の100軒の事例があったとして、そのうちの98軒はたぶん行き詰ってしまうでしょう。その暗い現実のほうに光を当てるのは、実は簡単です。でも「まあ、そうなるだろうな」で終わってしまっては、小説として面白くない。中にはうまく事業をやり遂げる会社もあるのだし、現実の厳しさばかり強調するお話では救いがありません。

市長　そうですね。その残りの2軒になるためには、どんな工夫が必要だと思われますか？

池井戸　そういう会社はきっと、高く評価される何かを、もともと持っているのだと思います。たとえば、独自の技術とか、取引先とか、コストを抑えた優秀な労働力とか。自社の強みを生かす発想の転換さえできれば切り抜けられるんですが、その強みが何なのかが、意外とわからない。自分たちにとっては当たり前のことが、第三者から見ると非常に価値のあることだったりするんですが、そういう目利きのできる人がもし行政の中にいたら、復活の鍵になるかもしれません。

市長　そういうことは、往々にしてありますね。自分たちの持っている価値に気づくこと、それは、産業だけでなく地域振興にも大事な観点だと思います。人口減少、少子高齢化が叫ばれる現在、都市間ではすでに競争が始まっていて、街の活性化は急務ですが、市としては『陸王』を契機に、足袋にスポットを当てたプロジェクトも展開中です。池井戸さんの作品は映像化されることが多いですが、もし『陸王』がそうなれば、全面的に協力したいと思っています。

池井戸　ありがとうございます。心強いことです。

市長　行田市には『のぼうの城』（和田竜氏の小説。平成24年に映画化）に登場した忍城や古墳、ギネス世界記録に認定された世界最大の田んぼアート、美しい古代蓮の見られる公園もある。こうした風景を、ぜひ映像で全国の方々に見ていただきたいですね。小説の冒頭に登場する、100年前のドイツ製のミシンの音なども、ぜひ登場させてもらいたいと思います。

池井戸　古代蓮は、私はまだ咲いたところを見たことがないので、そうなれば楽しみです。文章ではなかなか書ききれませんが、ランナーたちが走る描写などは映像が得意とする部分ですので、見応えがあるでしょうね。

市長　映像で行田を知っていただき、交流人口の拡大を図れたらいいですし、市民の方々にも、あらためてわが街のよさを再確認していただきたいですね。先ほど池井戸さんがおっしゃったように、あって当たり前だと思っていた価値に気づくことが、街の活性化には大切なことだと思うんです。そのきっかけを作ってくださった『陸王』に感謝したいと思います。

池井戸さんのサイン入り著書『陸王』を5名様にプレゼント！

市内在住・在勤・在学の方を対象に、池井戸潤さん直筆のサイン入り著書「陸王」を5人の方にプレゼントします。

《応募方法》

住所、氏名、電話番号を記入の上、1月31日㈫まで（必着）にはがきまたはEメールでご応募ください。
※1人につき1通分の申し込みのみ
【はがき】〒361―8601 行田市本丸2―5 行田市広報広聴課「新春対談プレゼント」係
【Eメール】rikuoh@city.gyoda.lg.jp
なお、発表は発送をもってかえさせていただきます。